

詩人と皇帝

——『テーバイス』の中にドミティアースは描かれているか——

山 田 哲 子

「白銀時代」の叙事詩，スターティウスの『テーバイス』の中には，時の皇帝ドミティアースに関する言及はあるのだろうか？ またあるとすれば，悪名高い皇帝はどのような描かれ方をされているのだろうか？ この問いに対する答えは，表面上は簡単のようだが，実は深い問題を内包している。

まず，表面的に簡単な答えから始めてみよう。ドミティアースに対する直接の言及は，以下に上げる叙事詩の冒頭の部分だけである。

(1.16-33)

limes mihi carminis esto

*Oedipodae confusa domus, quando Itala nondum
signa nec Arctoos ausim spirare triumphos
bisque iugo Rhenum, bis adactum legibus Histrum
et coniurato deiectos uertice Dacos
aut defensa prius uix pubescentibus annis
bella Iouis. tuque, o Latiae decus addite famae
quem noua maturi subeuntem exorsa parentis
aeternum sibi Roma cupit (licet artior omnes
limes agat stellas et te plaga lucida caeli,
Pliadum Boreaeque et hiulci fulminis expers,
sollicitet, licet ignipedum frenator equorum
ipse tuis alte radiantem crinibus arcum
imprimat aut magni cedat tibi Iuppiter aequa
parte poli), maneat hominum contentus habenis,
undarum terraeque potens, et sidera dones.*

tempus erit, cum Pierio tua fortior oestro
facta canam:

スターティウスはまず、この叙事詩の主題はオイディプスとその子供たちの神話であると明言し(16-17)、ドミティアヌスの戦功を称えて歌うことはまだできない、とへりくだりつつ、その戦功がいかなるものかを簡略ながらも技巧をこらして列挙する(17-22)。続いてドミティアヌスに直接に呼びかけて、いかにローマがあなたを必要としているかと称揚し(22-24)、天上の神々もあなたを一員として受け入れることを望んでいるが(24-30)、どうかあなたには下界に支配者として留まって欲しいと懇願する(30-31)。そして、いずれは皇帝の戦功を歌う時が来るだろう、と約束している(32-33)¹⁾。

この後、叙事詩の中には、ドミティアヌスに対する言及は、少なくとも表面上は出てこない。つまり、表面上は、この『テーバイス』という叙事詩は、詩人の生きている時代のローマとは全く無関係な、非現実的な神話だけを扱っている、ということになる。

このような見解は、従来のスターティウス研究者にとっては一般的なものであった。

例えば Ogilvie は²⁾、スターティウスの時代は、ドミティアヌスの独裁政権の下にあり、政治や国家などに関する問題を人々が発言できなくなっていた、と説明した上で³⁾、この時代に、最近の歴史や政治を叙事詩の主題にすることは危険であり、神話上の事件を取り上げる方が安全であった、と述べている⁴⁾。

この上で Ogilvie は、『テーバイス』は内容的には全く空疎で、スターティウス自身の主張は何も入っていない、という否定的な評価を下している⁵⁾。

つまり、Ogilvie によれば、『テーバイス』は、現実的な政治・歴史を排除して、神話の世界のみを扱っていることになり、当然、ドミティアヌスについても何も触れていない、ということになる。そして、唯一言及しているのが皇帝への賛辞であるからには、スターティウスは、後世の悪名高い皇帝を手放しで褒め称え、その武勲を叙事詩にすることを約束していたものの、実際に書かれた叙事詩『テーバイス』では、ドミティアヌスとは全く無関係な、神話の世界の物語が語られているの

だ、ということになるだろう。

しかし、二十世紀の後半になってから、テバイス評価（あるいはスターティウス評価）は大きく変わって来ている⁶。

とりわけ注目すべきものは、F. Ahl が 1986 年に発表した 'Statius' Thebaid: A Reconsideration' である⁷。

この論文で Ahl は、スターティウスの生きた時代は、フラウィウス朝が成立するまでの内乱の記憶がまだ生々しい時代であることを指摘した上で、王位を巡って兄弟同士や同国人同士が殺しあう『テバイス』は、非現実的な神話であるどころか、むしろその時代のローマの現実を反映しているのだと主張している⁸。

さらに大胆に、エテオクレースにはドミティアヌスの姿が重ね合わせられており、スターティウスは遠まわしに皇帝を非難しているのだとも論じている（ただし、エテオクレース＝ドミティアヌスという単純な対応関係を考えているわけではない⁹）。

この Ahl の説が、従来のスターティウス観と正反対のものであることは言うまでも無い。特に、スターティウスがドミティアヌスに対して批判的だという説は、『シルウァエ』1巻1，4巻1・2・3の皇帝賛美とは著しく矛盾する。だが Ahl は、『シルウァエ』における皇帝賛美からも、表面上の美辞麗句に隠された裏の意味が読み取れる、と主張している¹⁰。

Ahl の革新的な主張は、必ずしも全ての研究者に受け入れられているわけではない。だが、無視することのできない説得力があるように思われる。ひとたび疑いの目をもって『テバイス』を読んで見ると、単純に神話の世界だけを描いているとは思えないし、ましてやドミティアヌスを手放して賞賛しているとも思えなくなるような所が、いくつも見られるからである。

神話の世界を描くことによって、実際には「(詩人にとっての)現代」を表現するというのは、ラテン叙事詩の伝統である。スターティウスが範と仰ぎ積極的に模倣している『アエネーイス』でも、トロイア戦争直後の神話を語っているながら、その実、アウグストゥスの時代のローマについて語っているという所が随所に見られる。同じように『テバイス』でも、表面上は神話のテバイについて語っているように見えて、

その実、ローマについて語っているのではないが、と思わずにはいられない所がいくつもある。

例えば、『アエネーイス』でローマの民や都に冠せられている表現が、『テーバイス』でテーバイの人や地名に用いられているということがあつる。『アエネーイス』6巻777行でロムルスは、マルスから生まれた者として *Mauortius* と呼ばれ、同じく6巻872行では、ローマが *Mauortius urbs* 「マルスの都」と呼ばれている。この6巻が、アンキーセースによる将来のローマの予言であることを考えると、ローマとマルスとの結び付きが強調されていることは明らかである。

この、ローマとマルスの血縁関係を表現するために用いられる形容詞 *Mauortius* が、『テーバイス』の中でもしばしば用いられている。これは、カドモスがテーバイを建国する時の神話、マルスの眷属である竜を殺してその齒を蒔いたところ、地面からテーバイ人の祖先が生まれて来た、従つて、テーバイ人はマルスの末裔になる、ということに由来している。1巻680行でテーバイは *tellus Mauortia* 「マルスの地テーバイ」と呼ばれており、4巻345行でも、テーバイの人々は *Mauortia plebes* 「マルスの血を引く民」と呼ばれ、クレオーンの息子のハイモンも、「蒔かれた者(スパルトイ)」の血を引くものとして *Mauortius Haemon* と呼ばれている。さらに、ティレシアースが冥府の亡霊を呼び出す儀式を行うのは、かつてカドモスが竜を殺して齒を蒔いた野原 (*campi*) であり、ここも *tellus Mauortia* と呼ばれている。

また、これは *Ahl* が指摘していることであるが、テーバイの独裁者となつたエテオクレスへの呼びかけとして、*princeps* という称号が用いられている場面がある。スターティウスの時代、この称号は皇帝に対して用いられるものである。

そもそも『テーバイス』で歌われている神話は、「兄弟同士が最高権力の座を巡つて殺しあう」というものである。そしてスエートーニウスの伝えるところによるとドミティアヌスは帝位に就いた兄ティトゥスを妬んで、常におとしいれようと企んでおり (*Titus* 9)、ティトゥスが重病にかかると、息を引き取るよりも前に、もはや死んだものとして遺棄するようにとドミティアヌスは命じたという (*Domitianus* 2)。

真偽の程はともかくとして、ドミティアヌスは帝位を手に入れるために兄弟をおとしいれようとしていた(あるいは実際に死期を早めさせた)

という噂があったわけである。このような皇帝のもとで、「独裁権力のためには兄弟をも殺す」という神話を描くことは、Ogilvie の言うような、現実のローマを反映していない「安全な」行為と言えるだろうか？

現にスエートーニウスによれば (Domitianus 10)、タルソスのヘルモゲネースは歴史書の中に書いたことが理由で処刑されており、ヘルウィディウス・プリスクスも喜劇の中でドミティアヌスの離婚を非難したとして殺されている。同様にスターティウスの『テーバイス』も、皇帝を非難していると受け止められかねないのではないだろうか？

スターティウス自身が皇帝にどのような思いを抱いているのであれ、『テーバイス』の中で「権力者」は、ほとんど全ての場合、否定的に描かれているのが実情である。

オイディプスの息子たちの間に確執が生じたのは、冥府の女神によって心に憎しみを掻き立てられたためであるが、ここで二人の心に中に生じた感情は、次のように述べられている。

inde regendi

saeuus amor, ruptaeque uices iurisque secundi
ambitus impatiens, et summo dulcius unum
stare loco, (1.127-130)

そして支配することへの

狂暴な欲求、互いの順番を破り、次席の権利に

甘んじることが出来ない野心、そして、何より甘美な、

ただ独りで最高の地位に立つこと

この個所から、エテオクレースとポリュネイケースの争いは、単に父親の跡目を巡る相続問題でもなく、土地や財産の奪い合いですらなく、独裁権力への欲求であることは明白である。

さらに、籤引きによって先にテーバイの支配権を得たエテオクレースに対して、スターティウスは、「残虐な者よ」と呼びかけ、実際に独裁権力者の座に就いた時の気分は如何ばかりかと問い掛ける¹¹⁾。

iam sorte carebat

dilatus Polynicis honos. quis tunc tibi, saeue,
quis fuit ille dies, uacua cum solus in aula
respiceres ius omne tuum cunctosque minores,
et nusquam par stare caput! iam murmura serpunt
plebis Echioniae, tacitumque a principe uulgus
dissidet, (1.164-170)

今や籤引きの結果，後回しにされて

地位を失ったのは，ポリュネイケースの方だった。その時おまえにとつては，残虐な者よ

それは何という日であったことか。空ろな宮殿にただ独り

全ての権力を己のものとし，あらゆる者が目下となり

いかなる者も決して肩を並べることは無いと認識したその時は！

今やテーバイの民の喧騒が

密かに広まって行く。民衆は黙って君主から

遠ざかる。

Ahl は、この箇所ではエテオクレスが “ princeps ” と表現されていることに注目している。すなわち、この称号はスターティウスの時代には「皇帝」の称号として用いられたものであり、スターティウスはここでエテオクレスとドミティアーンヌスを重ね合わせているのだと考える。つまり、表向きは神話上の人物に語りかけているように見せかけて、実際には、ドミティアーンヌスを批判している、というのである¹²⁾。

さらに兄弟の死後、テーバイの支配者となったクレオンも、権力の座に就いた途端に傲慢な暴君に変貌する。

scandit fatale tyrannis

flebilis Aoniae solium: pro blanda potestas

et sceptri malesuadus amor! numquamne priorum

haerebunt documenta nouis? iuuat ecce nefasto

stare loco regimenque manu tractare cruentum.

quid, melior Fortuna, potes! iam flectere patrem

incipit atque datis abolere Menoecea regnis. (11.654-660)

(クレオンは) 暴君に死をもたらす

移ろいやすいテーバイの王座に就いた。ああ蠱惑的な権力よ，
そして，王杓へと唆す欲望よ！ いったい過去の範例が，
新たな者たちに残ることは無いのだろうか？ 見よ，忌まわしい地
位に立ち，
血塗られた手で権力を揮うことを，彼は喜ぶ。
より良き運命よ，おまえに一体何ができようか。もはや，父親らし
さは失われ始め，
王権を与えてくれた息子メノイケウスのことも消え失せて行く。

この後クレオンは，盲目のオイディプスを追放し，テーバイ人の
骸を葬ることを禁じる。つまり，ギリシャ悲劇で言及されているクレ
オンの非人道的な行為は、『テーバイス』では全て，独裁権力の座に
就いたことから生じた悪心の表れとして描かれているのである。

これらの例から見ても，スターティウスは，「権力が人間を墮落させ
る」とみなしており，決して権力者を好意的に描いていないことは明ら
かである。

人間の世界だけでなく，神々の世界でも，権力者は決して肯定的に描
かれてはいない。神々の支配者である至高のユピテルは，伝統的な叙事
詩の約束事に則った「神々の会議」の場面において，それ以前の作品で
はあり得ないような恐怖の対象として描かれている。

mediis sese arduus infert

*ipse deis, placido quatiens tamen omnia uultu,
stellantique locat solio; nec protinus ausi
caelicolae, ueniam donec pater ipse sedendi
tranquilla iubet esse manu. (1.201-205)*

神々の中に一際高く

(ユピテルは) 進んで行く。静かな表情でありながら，全てを戦かせ
つつ，

きらめく玉座につく。天上の神々も，

続いてすぐに着席するような大胆なことはしない。その許可を，
御父自らが穏やかな手振りで与えるまでは。

postquam iussa quies siluitque exterritus orbis,

incipit ex alto (1.211-212)

沈黙が命じられ、一同が恐懼して静まり返ると

高みから（ユピテルは）語り始める。

ここで描かれているユピテルは、「静かな表情」の時でさえも、その場にいる人々を恐れさせるような王者であり、鷹揚な許可が与えられるまでは着席することも憚られるような、桁違いの上位にいる存在なのである。

ちなみに、『アエネーイス』10巻1-5行でも同じように「神々の会議」をユピテルが召集しているが、他の神々との間にこれほどの格差を感じさせるような描写は一切ない¹³⁾。『アエネーイス』のユピテルは、他の神々の中でも抜きん出た存在ではあっても、他の神々から恐怖心を抱かれるような独裁者ではない。

さらに同じく『アエネーイス』1巻142-156行には、ネプトゥーヌスが嵐を治める場面がある。ここでのネプトゥーヌスは、暴動を鎮める人物になぞらえられているが、この比喻の中では暴徒らは、徳性に優れた人物を目にし、その「言葉」を聞くことで、従わせられるのである。このように『アエネーイス』と比較するとますます、『テーバイス』のユピテルが、本人の威光によって他を従わせていると言うよりも、恐怖心によって他の神々を抑えつけている、という印象が強くなる。

このようなユピテル像には、あるいは、Ogilvieの言うようなドミティアヌスの独裁政権が反映されているのかもしれない。

『シルウァエ』ではしばしば、人々の王であるドミティアヌスは神々の王であるユピテルになぞらえられている。とりわけ4巻ではそれが顕著で、2歌ではドミティアヌスの宴会に招かれたスターティウスは

mediis uideor discumbere in astris

cum Ioue et Iliaca porrectum sumere dextra

immortale merum! (4.2.10-12)

星々の間で、ユピテルと共に宴席に座し、

トロイア人 (=ガニユメーデース)の右手から差し出された
不死の酒を酌む思いだ。

と感動を熱く語っている。また、3歌ではシビュラの口を借りて次のようにドミティアースに呼びかける。

hic est deus, hunc iubet beatis
pro se Iuppiter imperare terris; (4.3.128-9)
彼こそ神。彼こそが幸福な下界で
自分の代わりに支配するよう、ユピテルは命じる。

スターティウスにとっては、人間界の王者ドミティアースを天界の支配者ユピテルになぞらえることが、自然な発想であるように思われる。それならば、『テーバイス』の中で恐怖の対象として描かれているユピテルにも、ドミティアースの姿が投影されていても不思議なことではない。

ちなみにスエートニウスの伝えるところによれば、ドミティアースは苛酷な処罰を与える前にはわざと慈悲深い顔を犠牲者に向けてという残忍さを持っており、そのために「皇帝の優しさほど確実な死の徴は無い」とまで言われるほどだったと言う (Domitianus 11)。

その他にも、『テーバイス』に登場する権力者は、ほぼ例外なく否定的な描き方をされている。

ポリュネイケースは、エテオクレースに比べれば同情的に描かれているが、彼の行動の原動力となっているのは、強烈な権力欲でしかない。とりわけ、エテオクレースとの最後の決闘で相手に致命傷を負わせた時に見せた歓びは、肉親の情を全く欠いており、同情に値するとは思えない。(11.556-562)

また、アルゴスの王アドラーストスは、柔和 (mitis) で、ポリュネイケースが近親相姦の結果生まれて来た子であることを知った上で娘婿として受け入れるほどの度量の広さを見せるが (1.681-695, 2.151-172)、同時にやや優柔不断でもあり、戦いにはやる自国の民を抑える力に欠けている (3.440-449, 3.568-597)。しかも、ポリュネイケースとエテオクレ

スの兄弟が決闘を始め、これを留めることができないと悟るや否や、義理の息子を見捨て、自分が率いるべき軍隊の生存者も戦死者の遺体をも省みず、全力で戦場から逃げ出してしまふのである。(11.439-443)

長大な叙事詩の最後に登場して戦乱を治めるテーセウスだけが、かうじて唯一の例外かと思われるのだが、よく読んでみるとこのテーセウスも必ずしも肯定的な描き方をされているとは言いにくい。

従来、多くの研究者はテーセウスのことを、慈悲深く公正な君主であり、秩序の回復者であるとみなしてきた¹⁴⁾。確かにテーセウスは、アルゴスの女たちの嘆願を聞き入れる慈悲の持ち主であり、テーバイの「暴君」を打ち倒して秩序を回復し、しかも戦死者の埋葬を許可する正義漢である。

だが、嘆願する女たちの前に現れたテーセウスの傍らには、ヒッポリュテーがあり、しかもすでに子供を身ごもっていることが二度も言及されている(12.533-535, 12.635-8)。この子供は言うまでも無く、後のヒッポリュトスであり、義理の母パイドラーとの不倫関係の咎でテーセウス自身に呪い殺される運命にある。(義理とは言え)母との不倫、父に呪い殺される息子、これは、オイディプースの神話を想起させずにはいない。

ストーリー上は、テーセウスは戦いに終止符を打ち、平和を回復させたように見える。だが、オイディプースの家で起きた悲劇は、テーセウスの家でもまた繰り返されるのが暗示されている。このように暗い将来が暗示されているテーセウスを、美德の具現化と考えるのには無理があるのではないだろうか。

このように、『テーバイス』の中ではスターティウスは、権力者のことを決して肯定的に描いてはおらず、むしろ否定的に描いているのは明らかである。従って、少なくとも「理想の君主としてのドミティアヌス」は描き出されていないということになる。もし直接的ではないにせよ、ドミティアヌスが描かれているのだとしたら、それは、「権力によって墮落してしまった罪深い人間」の中に反映されていることになるだろう。

しかし逆に、スターティウスが(従来の見解のように)ドミティアヌスを心から褒め称えていたのだとしたら、『テーバイス』の中のユピテルやテーセウスに「理想の君主としてのドミティアヌス」が投影され

ていないことは、むしろ奇異なことなのではないだろうか。

『テーバイス』は意図的に『アエネーイス』を模倣している叙事詩である。それならばウェルギリウスが主人公アエネーアースに皇帝アウグストゥスの姿を重ねているように、スターティウスもドミティアースを神話上の誰かに投影して褒め称えようとは思わないだろうか。『シルヴァエ』の中でドミティアースを賛美する時、ふんだんに神話を用いていることを考えると、『テーバイス』の中では皇帝について何の言及も無いということは、不自然なことにも感じられる。

オイディプスの息子たちやクレオンなど、神話の中ですでに否定的に描かれている人物はともかく、神々の王ユピテルや最終的な勝利者であるテーセウスに、ドミティアースの姿を投影して賛美することは、職業詩人としてはむしろ自然な行為のほうではないだろうか。それなのに、ユピテルを恐怖の対象として描いたり、テーセウスをわざわざ「我が子を呪い殺す父親」と描くのは、やはり不自然で奇異なことと言わざるを得ない。

では、Ahl が主張するように、スターティウスはテーバイ神話という隠れ蓑の下で、現実のローマ皇帝ドミティアースに対する非難を密かに歌っているのだろうか。叙事詩の冒頭で「オイディプスの家のことだけを歌う」「ドミティアースを叙事詩に歌うことは、まだできない」と明言していたのは、独裁者に粛清されることを恐れるが故の巧みな言い逃れにすぎなかったのだろうか。

だが、そのように断定するには、まだ疑問が残るといわざるを得ない。

まず、スターティウス自身が、そうまでしてドミティアースを非難するだけの必要性なり動機なりがあったのかどうか、という疑問がある。父親の代からの職業詩人で、おそらく政治の世界とは無関係の立場であるスターティウスが、そこまで精緻な詩作の手段を弄してまで、時の皇帝を批判しなければならぬ理由が本当にあるのだろうか。

もちろん、社会的な立場とは無関係に、純粋に個人的な感情を吐露しているという可能性も無いでもない。だが、これは筆者の私的な印象ではあるが、『テーバイス』という作品からは、そこまでせずにはいられない強い個人的な意志や主張と言ったものが伝わって来ない。スターティウスの作品は、良くも悪くも情緒的なものではないかという印象を筆

者は持っている。

率直に言って現段階では、この問題に結論を下すことは難しい。これだけ権力者を否定的に描いているスターティウスが、ドミティアヌス（と言うより、「皇帝」という最高権力者）を褒め称えるということは考えにくい。しかし、だからと言って、Ahlの主張するような、意図的にローマ批判を行うだけの理由があったのかどうかもわからない。研究者たちの間でも、この問題に関しては意見の一致を見てはいない。

詩人スターティウスが皇帝ドミティアヌスに対しどのような思いを抱いていたか、またそれをどのように表現したかについては、『テーバイス』のみならず『シルウァエ』のさらに詳細な検討や、スターティウスの生きた時代の背景などについてなど、多角的な研究が必要とされるだろう。

注

- 1) 過剰なまでの追従のようにも見えるが、叙事詩の冒頭で皇帝に賛辞を送ることはラテン叙事詩の伝統でもある。あのルーカーヌスも『ファルサリア』の冒頭でネロを褒め称えており(1.44-66)、ネロが死後に天上に上げられた時には他の神々も場所を空けるであろうと述べ(45-51)、いやすでに自分にとってネロは神である(sed mihi iam numen: 63)とまで言うのである。このように皇帝を神々と同列視することは、死後の神格化を考えればそれほど大げさな表現とは言えないだろう。天に上がった皇帝のために他の星々がその座を空けるという表現は、ウェルギリウスの『ゲオルギカ』にすでに見られる(1.24-42)。従って、『テーバイス』における皇帝賛美も、単に叙事詩の慣習に則って伝統的な文言を並べたに過ぎない、という可能性も無いではない。
- 2) Ogilvie, R.M., *Roman Literature and Society*, (first published 1980, reprinted 1991)
- 3) *ibid.* p.224, 226
- 4) *ibid.* p.232
- 5) *ibid.* p.234
- 6) 『テーバイス』評価の変遷については、Dewar, M., *Statius Thebaid IX*, (1991) p.XXIXに簡潔にまとめられている。
- 7) Ahl, F.M., 'Statius 'Thebaid: A Reconsideration' ANRW II 32.5 (1986) 2803-912
- 8) *ibid.* pp.2812-2816
- 9) *ibid.* pp.2832-2834

- 10) 'The Rider and the Horse: Politics and Power in Roman Poetry from Horace to Statius' ANRW II 32.1 (1984) 40-110
- 11) エテオクレスとポリュネイケースの兄弟のうち、どちらの方にテーバイの王位に就く優先権があったのかについては、作品によって異なっている。エウリーピデースの『ポイニッサイ』では、年長のエテオクレスが先に、ポリュネイケースの合意のもと、一年間だけの約束で王位に就いている。これに対してソポクレスの『コロノスのオイディプース』では、ポリュネイケースの方が年長で先に王位に就いたにもかかわらず、年少のエテオクレスが無理やりに王位を奪って兄を追放したことになる。ちなみにスターティウスの『テーバイス』では、兄弟同士が合意の上で、王権を一年交替にすることにし、どちらが先に王位に就くかは籤引きで決めるようになっていた。この籤引きでポリュネイケースが負けたために、エテオクレスが先に一年間だけ独りでテーバイを治めることになったのである。
- 12) op.cit. pp.2832-2833
- 13) 『アエネーイス』の会議召集の場面では、恐怖も畏怖も一切言及されていない。ただし会議の最後にユピテルが語り始めるところでは、eo dicente deum domus alta silescit / et tremefacta solo tellus, (10.101-102)と、大地が畏れる様が描かれている。また、ユピテルが決定を下す場面でも、totum nutu tremefecit Olympum. (10.115)と、オリュンポス全体が震撼すると描かれている。だが、これらはユピテルの威厳を示す表現に留まっており、他の神々に与える恐怖心にまでは至っていないと思われる。
- 14) Vessey, D., *Statius and The Thebaid*, (1973) pp.307-316